ニュートラリティブラッド

ぐーや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ニュートラリティブラッド

【Ｎコード】
Ｎ１１１８Ｚ

【作者名】
ぐーや

【あらすじ】
毎日同じように過ぎていく日常に変化を求めていた
高校２年生の鬼島　陽人はいつもと同じ日常にきっかけを見つける。
そのきっかけを頼りに走りだす鬼島は
はたして、日常を変えることができるのか……。

日常

チュンチュン、という鳥のさえずりで目が覚めた。
うつらうつらと寝ぼけながら、ぼやける視界で服を探す。
ふらつきつつも見つけた服を着る。眠い、とにかく眠すぎる。
やっと服を着終わって、またゆっくりとした足取りで階段を下りる。
「陽人、早く起きないと遅刻するわよ～」
「わかってる、今降りてるよ」
こうやって、いつもと変わらない朝が来る。
「もう8時よ」
母の変わらない声。
「マジで！？」
どたどたと走って玄関に行く。これもいつもと同じ。
「ごはんたべないの～？」
「いい！」
こんな日常が、大切なものだと気がついて居れば
「いってきま～す」
今はまだ、いつもの面倒くさい日常だったのに。
今はもう、失われてしまった。
あの「日常」。

暗く、底の見えない闇。
その中に何かがいる。よく見るとそれは人だった。
いや正確には人だった「何か」だ。
その人だった「何か」は、闇の中でまだ目を覚まさない。

「鬼島」
「……」
「鬼島」
「……」
「鬼島！」
「えっ……あ、何だ？お、俺は寝てないぞ……うん」
「ホームルーム終わったぜ、早く帰るぞ」
「お、おう、サンキュー川島」
机の横にあるカバンをひっつかんで足早に教室を出る。
見ると、川島はもう少し歩き始めていた。
「おい、待てよ川島」
「お前がおせぇんだよ」
川島は小学校の時からずっとこんな感じだ。
「わりぃわりぃ」
「ぜってー悪いと思ってねーだろ」
む、鋭い。こいつ勘がいいのかもしれん。
こんな他愛もない会話も、少しは楽しかった。
けれど、やはり
今の「日常」を変えたかった。変われる何かが欲しかった。

闇の中で「何か」は目を覚ましつつあった。

意識が覚醒に向かうにつれて、どんどん増していく欲求と
それが叶わないことへの不満。
そんなジレンマの中で「何か」は感じとる。
一つの、予感を。

だから、その音を聞いた時、そこに向かおうの思ったのは偶然では
なかった。
普段だったらほっておくだろうそんな音も
むしろ何らかの必然性すら感じるタイミングで
「ガッシャァン！」
どこかでガラスが割れる音がした。
自分の中に、変われる確信があった。
根拠のない一方的な確信。
だから走った、音のした方向へ。
だがそれは、思いもよらぬ形で実現される。
そしてそれを知らぬまま、走る、その核心へと。

「何か」は求めていた。
欲し求め、しかしそれと同時に気が付いていた。
求めるものが近づくのを。
「何か」は建物の中に居た。
もうずっと昔に潰れた、小さな廃ビルの奥。

そこでじっと待つ。獲物が来るのを。
そのビルのガラスは、ほとんど割れていた。

「おい、おい！待てよ！待てって！」
「なんだよ！」
「何ってお前がいきなり走り出したんだろ！」
「さっきの音、聞こえただろ！ほら、見てみろここだ！」
「お前、そんなことで？」
そんな川島の問いも、俺の興奮した顔を見て呆れたように
「で、入るのか？」
「もちろん」
そう、このときは変わりたかった。
ここにあるすべてが、きっかけに思えた。
もう一度、目の前にある二階建てと思われる廃ビルを見据え
迷いなくドアを開けた。
ドアは、以外にもすんなり開いてこけそうになった。
川島も黙ってついてきた。
入ってみると、そこは意外と広くきれいだった。
あくまで廃ビルとしては、だけど。
「おい、エレベータがあるぞ、あそこ」
「ホントだ！」
少しテンションが上がって思わずボタンを押した。
押した一瞬あとに気がついたが、廃ビルなんだからエレベータが動
くわけが……。
「う、動いてる……」
少しすると、ほこり臭いにおいと一緒にエレベータのドアが開いた。

ごっく……という息をのむ音がきこえた。
「マジで……乗るのか？」
川島の少し心配そうな目。
だがここまできた以上、引き返せないのも事実。
だってここには変わるための「何か」があるから。
「……行こう」
そう言って、ゆっくりとエレベータに乗りこんだ。

闇の中「何か」は笑った。
表情なんて見えないその空間で確かに笑った。
来る、来る、もうすぐ
ズズ、ズズズズ……と不気味な音を立てながら
「何か」は待つ。

チン……という音と同時にエレベータのドアが開く。
エレベータを下りると、そこは血の海。
なんてこともなく普通の部屋だった。
「以外と普通だな」
川島はぶっきらぼうに言った。
「ああ……何もないな」
その部屋には、ほとんど何も置かれておらず
しいて言うならば椅子にかかった白衣や、部屋の端に散らばっている

医療器具などが、ここが何かの研究に使われていたことを示していた。
だが、そんなものがありながらこの部屋には妙な清潔感がある。
「むこうにまだドアがあるぞ」
「ああ、むしろドアぐらいしか見えねー」
言いながらドアに近づく。
ノブに手をかけ、ひねる。
「ん？開かないぞ」
ガチャガチャと繰り返す俺に飽きれたのか
「変われ」
川島が俺を押しのけてドアに手をかける。
「おりゃぁー！」

匂い。人の、匂い。
すぐ近く、ドアの向こうに。
身体が、求める。
血を、肉を。
迫る目標を前にして、冷めやらぬ興奮の中。
ズズ、ズズズズ……。
ゆっくりとドアに近づく。
そして……。

川島が思いっきりドアのノブを回したその瞬間、一瞬にして視界が回転して天井を向いた。
「いってぇー、どうなったんだ？」
のっそりと起き上った俺の目が最初にとらえたのは開いたドアだった。
「川島？何処だ？」
だが、ドアの前には誰もいなかった。
どうやら、俺と川島は内側から開いたドアに吹っ飛ばされたようだ。
打った場所を抑えながら、辺りを見回す。
その直後に聞いた、グジュグジュという不気味な音。
音のする方には
「な……に？……か……わし……ま？……か、川島！」
川島の上に覆いかぶさるように、そこに居たのは。
人のような「何か」だった。
その「何か」は川島の首のあたりに顔を近づけ、何かをしている。
しかもよく見ると川島からは大量の血が流れ出ていた。
「な、なんだ！何が起きた！？くそっ、川島！」
そう言いながらも、恐怖で腰が抜けてしまった俺は動けない。
「た……すけて……くれ」
そんな叫びにもこたえることができない。
それでも何とか這いながら部屋の端にたどり着き、医療器具の中から武器になりそうなものを探す。
「た……す……け……」
やっと見つけたメスを手にした頃には、川島はもう虫の息だった。
血にまみれた友達の顔をみながら、それを見ても走りだせない自分をうらむ。
（動け……くそっ、動けよぉ！）
必死に這いずって近づこうとするも、川島の惨状が目に入るたびに体が恐怖に負けそうになる。
やけになった俺は、腕の勢いだけを使ってメスを放り投げた。

「うおらぁ！」
それは、運が悪くか良くか「何か」の頭に刺さった。
「ヴぉあぁぁ！」
川島から飛びのいてもがく「何か」。
「やった！？」
ズズズ、ズズズズ……
何かを引きずるような音と共に「何か」は起き上がりこっちをにらんだ。
にらみながら近づいてくる。
その目には、明らかな殺意。
「ひっ……、く、くるな、くるなぁ！」
一瞬で恐怖に負け、まさに蛇に睨まれたネズミ、と言う形相で予備のメスを振り回す。
そして、ゆっくりと着実に近づいてくる「何か」が、ついに俺に襲いかかろうとした時
パアァァン！
乾いた音が部屋に響き「銀色」の銃弾は「何か」の頭を貫いた。
カランカランと言う薬莢の落ちる音。
「っ、また一般人を巻き込んじまったか。」
ドッシャァァ、と「何か」が倒れる。
男はポケットから携帯のようなものを取り出し
「……ああ、俺だ。現場に一般人二名とマーラを確認。そのうち一人は鬼血化していると思われる。
もう一人はおそらく無事だ」
そんな声をぼんやり聞きながら、一方で焦った俺は川島に走り寄っていた。
「おい！川島、起きろ！川島！」
後ろで
「お前！何してる！？そいつは鬼血化してるんだぞ！」
「な、何を言って……うがぁ！か、かわ……し……ま、やめ……」

いきなり川島にかみつかれた俺は
「くそ！しかなたい、悪く思うなよ！」
「や……め……」
パアァァン！
と言う耳障りな音を最後にゆっくりと意識を落としていった。

真っ白な天井。
真っ白なベッド。
「ここは……病院？」
「そうだ」
あわてて声のした方向に振り返る。
「お、おまえは……川島はどうなったんだ。」
とたんに目をそらす男。
「お前、まさかあの時！」
「仕方なかった。もうあいつは鬼血化していた」
「なんなんだよ、キケツカって！お前誰なんだよ！ビルで見たあいつは！」
「っ、焦るなって、順を追って説明する。まず俺はダンピールだ。」
「それは一番どうでもいいし名前じゃなくて何なのかを聞いてるんだ！」
「次は鬼血化だが……」
「って無視かよ！」
「うるさいぞ！……鬼血化とは、あの化け物に噛みつかれた状態のことだ。そしてあいつマーラと呼ばれていて、あいつに噛まれたものは遅かれ早かれ皆マーラになる。要するに吸血鬼だ。」

「吸血鬼！？じゃあ……川島は」
「すまない……。俺のミスだ。あのビルにはもう一匹いたんだが、地下にいるのは気づくのが遅れた。
で、お前の話だが、お前も噛まれたのを覚えているな？」
「ああ、ってもしかして俺も殺されるのか？」
「するんならもうやってるよ。でもしなかった。」
「な、なんで！？」
「お前はなぜか普通の鬼血化とは違うみたいでな。だからほら、なんともないだろ？」
言われて、自分の体をぺたぺたと触る。
「なんともない」
「だが、なんともないと言っても完璧に鬼血化していないというわけではないんだ。」
「……？」
「お前の知っている吸血鬼の特性を言ってみろ」
「えーっと、血を吸う、十字架に弱い、日光を浴びると灰になる、ニンニクに弱い……」
指を折りながら数える。
「まあ、それぐらいでいい。今言った特性に当てはまるものがお前に影響している。
もちろん、全てではないしガセの特性もある。が、注意しろよ。」
「注意しろって？」
「取り合えず検査は終わったからお前は帰っていいぞ。」
「え？なんで？」
「なんでってお前にはとりあえず危害がないことが分かったから。なんなら地図を書こうか？」
「い、いいよ！自分で帰れる！」
「そうか、じゃあまたな」
そういってダンピールは部屋から出て行った。
少しの静寂の後、俺も静かにベットから降り、病院を出て、帰る。

もうなくしてしまった「日常」へと。

日常（後書き）

２作目ですが誤字・脱字・改善点などありましたらコメントお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1118z/

ニュートラリティブラッド

2011年12月4日02時48分発行